
遊戯王GXの世界に転生した物語（意外とそのまんまな題名）

四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GXの世界に転生した物語（意外とそのまんまな題名）

【Nコード】

N6304Y

【作者名】

四季

【あらすじ】

「今日、俺は遊戯王の世界に転生した」

何が言いたいのかわからないとは思うが気にするな、俺も思考が追いついていない。

とりあえずわかるのは、これからが楽しみだってことだ……。

プロローグ

「知らない場所だ………」

気が付いたら俺は、真っ白い空間にいた。

……おかしい、俺は確かに家で遊戯王のデッキを作っていたはずだ。

ちなみに俺の名前は不知火遊夜。高校2年だ。

少し戸惑いながら周りを見渡していると、なんかものすごいイケメンが突っ込んできて恐ろしい速さ（普通に見えなかった）で土下座した。

「どうも、すみませんでした!!!!!!!!!!!!!!」

「………は？」

いきなりの展開過ぎてまったくわからない。

とりあえずこういうことなのかを青年に尋ねてみた。

「なあ………どういうことだ？」

「じ、実はな……俺は神様なんだ！」

まずはそこからブツ飛んでますね。

「実は書類整理をしてたんだが暇でね、寝ていたら………」

「ね、寝ていたら………」

「君の書類に涎が付いて汚いと思って捨てたら、君が死んじゃった☆」

・・・へ？

「いやだから書類を捨てたら偶々君なので、その紙は君の人生が書いてあって、捨てたら死んだだってこと」

「うそだろお！？」

「いえ、本当です（キリッ）」

ええ・・・これからどうしろと・・・。

「特に驚いたり怒ったりしないことに俺は驚いた。君には特例として二度目の人生を歩んでもらうことになったよ」

「そうなんですか？」

「うん。世界は・・・。」

どこになるんだろうか？

二次創作ではアニメの世界が普通だが出来れば元の世界が嬉しい・・・って無理か。

「空いているのは遊戯王の世界だけだね。どの時代に行きたい？ カットビング？ シンクロ？ それともガッチャ？」

「できればガッチャで！」

即答してしまったが悪くはないと思う。
だって、面白そうじゃないか！！

「うん、じゃあ、チートはどうする？」

うーん・・・そんなのは特にいらないし・・・。

「それじゃあ、生前に持っていたカードを持って行きたいな」

「持っていけるのは10000枚が限界だけど？」

「じゃあ、必要なを教えるから持ってきてもらえると嬉しいです」

「じゃあ、この紙に必要なものを書いて」

「了解」

うーん・・・俺が使ってたのはこれとこれと・・・あとこれもだな。

あまりは・・・。。。

5時間後

「決めました」

「大分かったね」

「ええ、枚数が枚数ですから」

「じゃあ、準備はいいかい？」

「はい」

これで文句はないはずだ・・・たぶん。

「君の性別は男、年齢は零から・・・まずはここはOK？」

「はい」

「名前は今と同じ、両親は・・・まあ、どうなるかは不明」

「はい」

「あとは・・・まあ、こんなものかな？じゃあ、行くよ」

これから行くのか・・・少しどきどきするな・・・。

・・・と思っていたら地面にだんだん体が沈んでいきました。

「うえ!？」

「じゃ、がんばってね」

こんな始まりだが、ここから俺の新しい人生がスタートしたのである。

第一話／もう転生から10年が経ちました・・・え？早い？（前書き）

え？早い？

気にしたら負けですよ。

本編に入るために、この話が終わった後、また時間が飛びます。
ご了承ください。

では、一話目、どうぞ！

第一話／もう転生から10年が経ちました・・・え？早い？

生まれてからもう10年が過ぎました。

え？早い？

・・・お前ら、赤ちゃんの生活とか見て面白いと思うか？思わないだろ？

・・・と言う訳である。

お父さんとお母さんは・・・事故で去年亡くなった。

あの時は年甲斐もなく思い切り泣いたな・・・。

今は早乙女さん家にお世話になってます。

家？それは俺の家に住んでるけど。

5歳くらいにテレビを見て、KCが写ってたときはかなり興奮しました。

だって、KCだよ？遊戯王の世界に来たって言う実感がもてるじゃないか。

「・・・ちなみに今は、お世話になってる早乙女さんの家のレイちゃんの手をしています」

「・・・遊夜兄、誰に言ってるの？」

「気にしたら負けだよ」

そんな会話をしながら話していたら、郵便が届いた。

ピンポン！

「はい」

「この荷物に判子お願いしまーす」

「はい」

判子を押して受け取ると、神 進と書いていた。

・・・カードか。やっときたな。

中身を見ると、確かに俺が頼んだカード達だった。
・・・やっどデュエルができるな・・・。

そう思い、嬉しくなった。

いや、カード持ってないわけじゃないんだよ？ただ、親からもらったカードなんだけど、なんか危険なんだ。わからないけど。

「よし、レイ、デュエルしようか！」

「でも遊夜兄強いもん・・・」

「だ・か・ら、レイも強くするんだよ、今から」

「本当！」

メチャクチャ目をキラキラさせているmy従兄妹。
正直言って・・・可愛いです。

「じゃあ、さっさと組み上げて戦うか！」

「うん！」

く組み上げ始めて3時間後く

「やっとできた・・・な」

「うん・・・長かったね・・・」

そりゃあ、俺たちの時間で言えばこれは長いだろう……。

「時間もないから、明日またやろう？」

「うん……仕方ないね……。」

また……シュンとしてる……。

そんなレイはいやだな……。

俺はレイの頭をくしゃくしゃと撫でた。

「うわ！？何するの遊夜兄！」

「これからは何時でも相手してやるからそんな顔するなよ……な？」

「うん！うんうん！！！」

こうして、この一日は終わった。

〳次の日〵

「遊夜兄、きたよ！！！」

早朝8時、宣言どおりにm y従兄妹はやってきた。

ちなみに今日は平日だが、今日明日明後日明々後日は休みなのである。

昨日は日曜日、このあと3日ほどゴールデンウィークが残っている。そして、ゴールデンウィーク明けは……なんと俺の通う学校の創立記念日なのだ！

ふははははは！休みとはこれほどよいものだったのか！！

「遊夜兄？はやくデュエルしようよ」

「ああ、うん。わかった。わかったから揺らさないでくれ！？」

もう正直言っただけそうす……。

「ご、ごめんなさい」

「いいよ……それよりもデュエルだね？いいよ、やろうか」

こうして俺とレイはデュエルしたわけだが、俺が勝ち、レイがもう一回もう一回！と言うので、結局一日中やっていた。

……正直言っただけ……。

第二話／試験当日・・・やっぱり飛びすぎ？（前書き）

連続投稿の2日目。

今回はデュエルあります（当然か）。

では、本編どうぞ！

第二話／試験当日・・・やっぱり飛びすぎ？

またあれから5年が経った。

早い？そんなのご都合主義だ。なんとかなる。

ちなみに今日は受験日なんだが・・・。

「簡単すぎる・・・。」

テストを開始20分ほどで終わらせてしまった。

二次創作でブルーアイズ関連が多いのはテンプレだったが、まじであるとは思わなかった。

一問目、通常モンスターで一番攻撃力の高いモンスターは？

二問目、青眼の白龍の攻撃力・守備力を答えよ。

三問目、青眼の白龍の・・・etc.etc.・・・。

正直言って脱帽しました。

でも30問中の後半十問は普通でしたよ？

二十一問目、融合カードの特徴を答えよ。

二十二問目、巻き戻しについて答えよ・・・なんかがいい例だ。

暇すぎてたまらん。

正直言ってることがないんだが・・・。
寝るか・・・。

1時間後

「うん、よく寝た？」

気が付いたら皆帰ってしまっていた。

こんなところに一人でいるのって悲しいんだぞチクショウ！

「帰るか・
・
・
・
・」

とりあえず、今日は帰って英気を養うとしよう……。

1週間後

ふ・・・フハハハハハハハハハハ！ やつとこの日が来たか！！
 キャラが違う？

この日のデュエルが楽しみなんだよ！

「さてと、着替えて時間……は……?」

$$\begin{array}{c} 8 \\ \cdot \\ 3 \\ 0 \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \circ \end{array}$$

「ち、遅刻だあああああああああああああああああああああ
あああ！！」

俺の行動は早かった。

すぐさまデツキを持って家を出て、海馬ドームへと向かった。

「もうとくに俺の番終わってない!？」

ちなみに俺は二番である。

（10分後）

「や、やっとなついたぜ……。受験番号2番、結城遊夜、ただいま到着しました」

「うん？確認した。中に入れ」

中に入ると、丁度十代のデュエルが終わったところだった。

「ガッチャッ！楽しいデュエルだったぜ、先生！！」

「そんな、ワターシがこんなドロップアウトボーイに負けるナン・テ」

クロノスが、すごく落ち込んでいる。まあ、バカにしていた奴に負けるのはくやしいけどあんなにかと、考えていると。

「そのドロップアウトボーイも受験生ナノーネ？」

「はい。受験番号2番、結城遊夜です」

「なら、君の相手も私がするノーネ（受験番号2番なら倒せば汚名返上ナノーネ）」

クロノスはたぶんこれで汚名返上ナノーネとか思ってるだろうけど、まあいい。

デッキは……。あった……。ってこれかよ！？

下手なのでしたら危ないけど……。まあ、なんとかなるだろ。

「準備はいいノーネ？」

「はい」

デッキをディスクに入れて構える。

「^{デュエル}決闘（ナノーネ）！！」

クロノス…4000

遊夜…4000

「先行はワタシがもらうノーネ！ワタシのターン、ドロー」

クロノスがデッキからカードを引く・・・思うんだけどあのディスクって使いずらそうじゃない？

「ワタシはカードを二枚伏せて、大嵐を発動するノーネ！」

このパターンってことはおそらくあの伏せカードは…………。

「伏せカードは黄金の邪神像ナノーネ。よって効果により、邪神トークンを二体召喚ナノーネ」

やっぱりか。

たぶんあれを生贄にしてアニメと同じように古代の^{アンティークギョレム}機械巨兵を出す気か？

「邪神トークン二体を生贄に、ワタシは古代の^{アンティークギョレム}機械巨兵（攻3000／守3000）を召喚するノーネ」

像のようなトークンが地面の中に引きずり込まれるように消えていくと、地面から古く錆びた部品で出来た巨大な機械の人形が現れた。

やはりでてきたか……古代の機械巨兵……！！
周りは「終わった……」とか「勝てるわけない」とか言ってる
がまだまだだぜ？

「ワタシはカードを伏せてターンエンドナノーネ（伏せカードは聖
なるバリアミラーフォースナノーネ。攻撃してきたら返り討ちナノ
ーネ）」

クロノス（ターンエンド時）
LP…4000

手札…1枚

場…モンスター…古代の機械巨兵 ×1

伏せカード…1枚

「俺のターン！ドロー！！」

たぶん、いや絶対あの伏せカードは攻撃反応型だろう。

……ならば、

「俺は手札から、速攻魔法サイクロンを発動、その伏せカードを破
壊する！」

「ノー！？ワタシのミラーフォースが！？」

やはりミラーフォースだったか……危ない危ない。

「俺は手札からフィールド魔法Sin Worldを発動する」

おそらくこのカードでわかっただろうが、今回のデッキはSinデッキだ。

そして、今手札にあるのは………！

「っは！このターンで決めるぜ！！」

「ワタシの場には古代の機械巨兵がいるノーネ！そう簡単には行かないノーネ！」

「ところがギッチョン！俺はエクストラデッキにいるサイバー・エンド・ドラゴンを除外してSinサイバー・エンド・ドラゴン（攻4000／守2800）を特殊召喚する！」

俺の場には奇妙な仮面をつけたサイバー・エンド・ドラゴンが現れる。

「で、ででデモ？攻撃力は高くてもライフは残るノーネ」

「残念だが残させないぜ？速攻魔法リミッター解除、発動！」

Sinサイバー・エンド・ドラゴン 攻4000↓8000

念のために入れという正解だったな。
これで削りきれぬ。

「な、なななななな………！！」

「これで終わりだ！Sinサイバー・エンド・ドラゴンでダイレクトアタック！エターナル・エヴォリュション・バースト！！」

クロノス LP4000↓1000

「ペペロンチイイイイノオオオオオオオオオオオオオオオ~~~~！！」

「俺の・・・勝ちだ！」

ワンターンキルなんて久しぶりにやったぞ？
結構きつかったが。

ーワアアアアアアアアアアアアアアアアア！！

直後、歓声が起こった。

「すげえ」「あの状況で勝った!？」などいろいろな声が聞こえる。
さすがにここにいるのは恥ずかしいので退散することにした。

結果はどうなるんだろうか・・・？少し楽しみである。
俺はこれまでにないほど軽い足取りでそこを後にした。

第二話／試験当日・・・やっぱり飛びすぎ？（後書き）

今回の最強カードは『Sin サイバー・エンド・ドラゴン』。

効果モンスター

星10／闇属性／機械族／攻4000／守2800

このカードは通常召喚できない。

自分のエクストラデッキから「サイバー・エンド・ドラゴン」1体をゲームから除外した場合のみ特殊召喚できる。

「Sin」と名のついたモンスターはフィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

このカードが表側表示で存在する限り、自分の他のモンスターは攻撃宣言できない。

フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。

遊「攻撃力が4000と高く、出しやすいモンスターだ

それによって高確率でSin スターダストと共に入れられることが多いな」

ただし、フィールド魔法がないと破壊される点に注意だな。

遊「攻撃名は『エターナル・エヴォリュション・バースト』だぜ！」

~~~~~

まさかの主人公のデッキは【Sin】という・・・。

遊「意外と少なかったからな、使う奴」

実は最初は別なデッキを使う予定だったのですが、使う人が多すぎたのでこっちにしてみました。

遊「最初は何の予定だったんだ？」

最初はB Fの予定だった（笑）

遊「鬼畜だなオイ！」

――――

見てくださってありがとうございました。

誤字・脱字、プレイングミスなどありましたら、教えてくださいと助かります。

遊「感想もいつだって待ってるぜ」

これからもこの作品をよろしく願います！

## キャラクター設定／結城遊夜（前書き）

キャラ設定第一回目は主人公です。

遊「ふーん……」

では、どうぞ！

## キャラクター設定／結城遊夜

キャラクター

・主人公

◆名前

(転生前) 不知火 遊夜  
(転生後) 結城 遊夜

◆性別

男

◆身長

168 cm

◆体重

52 kg

◆年齢

17歳(転生前) ↓ 0歳(転生後) ↓ 16歳(本編開始時)

◆外見

茶髪に茶色の目。

イメージはハルヒの少し背の縮んだ古泉一樹。

◆性格

面倒なこと・理不尽なことが大嫌い。

また、弱いものいじめも嫌いで、アニメでカイザーを見てからはリ

スペクトデュエルをするようになった。  
その所為で全力で戦ったことが殆どない。

#### ◆使用デッキ

【Sin】・・・Sinパラドクスドラゴンなどを中心としたデッキ。

序盤は主にこれを使う。

【BF】・・・BFで構成された言わずと知れた鬼畜デッキ。

本気で戦ったときに使用される予定だった。  
前世でのフェイバリットデッキ。

【???】・・・登場後に更新予定。

【???】・・・上と同じく登場後に更新。

#### ◆所属

ラーイエロー



### 第三話／到着！デュエルアカデミア！！（前書き）

今回からあとがきにて、デュエルがあった場合は今回の最強カード、なかった場合はミニドラマ（?）をやってみることにしました！

遊「ほんとに出来るのか？」

う・・・。。

や、やってみせるさ！

と、言うわけで本編の後のミニドラマも見てくれるとうれしいです。  
では、本編どうぞ。

### 第三話／到着！デュエルアカデミア！！

今、俺はアカデミアへ向かう船に乗っている。

着ている制服が黄色いことからわかるように、俺はラーイエローだ。まあ・・・オシリスレッドよりは巻き込まれないし普通だからいいかな・・・？

ちなみに2番だった理由は三沢と違い公式大会に出ていないからだとか・・・。

そこらへんはアニメ基準じゃないんだな。意外だった。

「おい！！」

「ん？」

「お前、俺の後にあの先生倒した奴だろ？俺とデュエルしようぜ！！」

まさかの遊城十代とのエンカウト。

俺、そんなに目立ってたかな・・・？

「その前に、名乗れ。俺はお前の名前を知らん」

「え？ああ・・・俺は遊城十代、デュエルしようぜ！！」

「名乗られたからには名乗り返さないとな・・・俺は結城遊夜だ。

デュエルはアカデミアについてからでいいか？今はデッキの調整中だな」

「うーん・・・それなら仕方ないか・・・。じゃあ、あっち着いたらデュエルしようぜ！」

「ああ」

そういつて俺らは別れた。正直言って何もしていないのに疲れた。

やっと思つたか……。

そう思っていた俺のところにまたしても原作キャラがやってきた。

「やあ、2番君」

「君は……？」

「おっと、俺の名前は三沢大地だ。君のデュエルは実に興味深かったよ」

「それはどうも……俺は結城遊夜だ。君の事は耳に入れているよ」

「君ほどの人に覚えてもらっているなんてね……。同じ寮としてこれからよろしく頼むよ」

「俺はそれほど凄くないんだが……。これからよろしくな三沢」

「ああ。そろそろ着くからな……。じゃあ、また寮で会おう」

「ああ」

こうしてまた俺は別れた。

てか、原作キャラと会うの多すぎじゃないか？あっても一人だろう？まあ、別にいいが。

それにしても、三沢はアニメを見てたときの印象と違うな。

なんというかまあ……。気さくな奴だった。少なくとも悪い奴じゃない。

簡単に言うとな……。なんで空気化したのかわからない。いい奴じゃないか。

（数時間後）

今の今まで入学式を行っていた。

……。どこの世界でも、校長の話って長いんだな……。

そうしみじみと思った。

ちなみに十代は立ったまま寝ていた。

・・・器用だな。

ともかく、今俺はイエロー寮の前にいた。

お洒落なペントハウス調のそれは、ブルーに比べれば質素だが、暮らすには十分すぎると思う。

割り当てられた部屋に行くと荷物は既に届いていた。

中は意外に広く、快適に過ごせそうだった。

ちなみに、色分けとしては、オベリスク・ブルー>ラー・イエロー>オシリス・レッドの順で成績がいい。

さらに格差もあり、宮殿のような寮にフルコースの寮食が出るオベリスクと3人相部屋で木造モルタル2階建ての古アパートであり、食事も序盤はご飯・みそ汁にメザシという粗食では、天と地ほどの差もある。

正直言ってひどい。

っていうか、二次創作でいきなりブルーからっておかしくないか？  
設定では高校からだと必ずイエローかレッドのはずなんだけど・・・？

まあ、関係ないな。

「時間になるまで寝るか・・・？」

とりあえず、俺は時間まで寝ることとした。

### 第三話／到着！デュエルアカデミア！！（後書き）

ミニドラマ　／　あの後・・・。

　　遊夜が寝始めてから3時間くらい後

「おい、起きろよ。歓迎会始まるぞ」

「んゝあと12時間」

「つまり明日の朝まで起きない気か!？」

「むにゃむにゃ・・・。」

「頼むから起きてくれゝゝゝゝゝゝゝゝ!！」

・・・続く・・・？

~~~~~

遊「今回なんでこんなことはじめようと思ったんだ？」

・・・いやあ、面白そうだし、あとがき何も書かないと寂しいから、他の作品で見たとき書いてみようかなあって思ったからかな？

遊「つまりは他の作者さんのアイデアをいただいたと？」

YES。

遊「S i n トウルース・ドラゴン……」

遊夜くん？そんなモンスター召喚してどうする気かな……？

遊「あいつを消し飛ばせ！」

なあにこれえ………ギャーーーーー

！！！

→

作者は天に召されました。

遊「ふう……今回も見てくれてありがとう。

それからs i r a s u様、感想ありがとうございます。

また次回会おうぜ！！」

感想………待ってま……す………（バタツ）

第四話／対決！VS三沢（前書き）

今回の相手は三沢です。

いったい、どんなデッキを使うのでしょうか？

本編へGO！

第四話／対決！VS三沢

昨日・・・結局あのあと三沢に起こしてもらい、なんとか歓迎会に間に合った。

・・・後で三沢になんかお礼しとかなきやな・・・。

「お・・・・・・・・三沢！」

「ん・・・・・・・・？ああ、遊夜か。何のようだ？」

「いや、昨日の礼をしたくてね。探してたんだ」

「礼？」

「そう、だからデッキ見せてくれないか？」

どのデッキを使うかによって渡すカードを変えることになるからな。

・・・いったい三沢はどんなデッキを使うのだろうか？

「え？うーん・・・・・・・・。」

なら、デュエルしないか？デュエルで見極めればいいさ」

「その方法があったか・・・・・・・・。」

いいだろう、デュエルだ」

「今から10分後、寮近くの庭だ」

「わかった」

これから十分後、三沢とデュエルすることになった。

・・・勝てるかな？

「まあいい。ただ、戦い抜くだけだ」

―ただ、それだけだ・・・・・・・・。

（10分後）

「準備は言いか遊夜！」

「問題ない、いくぞ！」

「^{デュエル}決闘！！」

三沢…4000

遊夜…4000

「今回は先行は俺がもらう！俺のターン、ドロー！！」

引いたのは・・・Sin トウルース・ドラゴン。

正直言って今の状況じゃ特に何も出来ないようなモンスターだ。

「カードを2枚伏せて、魔法カード、テラ・フォーミングを発動する！」

手札に加えるのはSinWorld！」

これで手札は4枚。

「カードを裏守備表示で召喚してターンエンド！」

遊夜

LP…4000

手札…3枚

場…モンスター…裏守備表示 ×1

伏せカード…2枚

「俺のターン！ドロー」

三沢のターンか・・・。

ちなみに俺の伏せカードは激流葬とサイクロンである。

たぶん、ほとんどのことに対応は出来る・・・はずだ。

「俺は、E・HEROエアーマン（攻1800／守300）を攻撃表示で召喚！

エアーマンには、サーチ効果がある。俺は、E・HEROフォレストマン（攻1000／守2000）を手札に加える！」

「この瞬間！リバースカード激流葬を発動！場のモンスターをすべて破壊する！！」

大きな波により、場のカードが破壊されていく。

「そして、俺のモンスターはクリッター（攻1000／守600）！
よって効果によりSinパラレルギアを手札に加える！」

準備は出来た。

ここからは俺のターンだ。

「つく、俺はカードを伏せてターンエンド」

「その瞬間に、俺は伏せカードサイクロンでその伏せカードを破壊する」

「なに！？」

「そして、俺のターンドロー」

三沢

手札…5枚

LP…4000

場…なし

引いたカードは・・・Sinスターダスト・ドラゴン。

「俺は、フィールド魔法SinWorldを発動。・・・三沢、新しいSinを見せてやるよ。」

俺は、Sinパラレルギア（攻0／守0）を通常召喚！

これがこのデッキのエースだ！手札のレベル8Sinスターダスト・ドラゴンに、レベル2Sinパラレルギアをチューニング！！」

☆8＋☆2＝☆10

「チューニング？なんだそれは？」

「今から見せてやるよ・・・よく見てな！！」

場に出てきたギアのようなものは、二つの輪になり白い龍を囲んだ。

「次元の裂け目から生まれし闇、時を越えた舞台に破滅の幕を引け！シンクロ召喚！Sinパラドクス・ドラゴン（攻4000／守4000）！！」

「こ、攻撃力4000のモンスター・・・！？」

「ああ、ぴったりだろ？・・・バトル！！」

この一撃で終わらせる。

「Sinパラドクス・ドラゴンの攻撃、ダイレクトアタック！！」

「そんな馬鹿なああああああああああああああ！！」

三沢..4000↓0

「俺の、勝ちだぜ」

第四話／対決！VS三沢（後書き）

今回の最強カードは『Sin パラドクス・ドラゴン』。

《Sin パラドクス・ドラゴン》

シンクロ・効果モンスター

星10／闇属性／ドラゴン族／攻4000／守4000

「Sin パラレルギア」＋チューナー以外の「Sin」と名のついたモンスター1体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

自分または相手の墓地に存在するシンクロモンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる。

「Sin パラドクス・ドラゴン」はフィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

フィールド上に表側表示で「Sin World」が存在しない場合、このカードを破壊する。

遊「このデッキのエースカードだな。攻撃力守備力が高く、召喚も容易である点が強い」

ただし、他とは違い、フィールドがSinWorld限定の点に注意だ。

――――

今回はやけにあっさりと終わったね。

遊「手札がよかったからな」

ちなみに何だったの？

遊「クリッター、サイクロン、激流葬、テラフォーミング、Sin
トウルー・ドラゴン、終末の騎士だった」

それは ヒ ド イ！！

三沢ご愁傷様だな。

遊「さすがに悪かったと思ってるさ……」

――――

今回も見てくださいあってありがとうございます。

遊「語り部様、感想ありがとう」

これからがんばって更新していきたいと思います。

遊「誤字・脱字、プレイングミスがあったら教えてくれると助かる」

感想も待ってます。

遊「じゃあ、次回、また会おうぜ!!」

※11月22日、Sinパラドクス・ドラゴン召喚前後のところ訂正しました。

教えてくださった、語り部様、sirasu様、ゼクスユイ様、ありがとうございます。

第五話／三沢魔改造？（前書き）

すいません。

不慮の事故により更新が一日遅れました。

遊「不慮の事故？」

うん。データがぶっ飛んじやって、執筆中の小説のデータが全部消えちゃったんだ。

遊「大変だな」

だって、このPCスペック意外と低いからね！！

遊「まあ、本編をどうぞ」

第五話／三沢魔改造？

さっきのデュエルでわかるとおり、三沢のデッキは漫画版E・HEROみたいだ。

こちらは属性HEROが多いデッキだな。

「沼地の魔人王とかってそのデッキに入れてるのか？」

「いや、入れてないな……」

それよりも、さっきのシンクロ召喚とやらが気になるんだが……」

あー……あれか……」

「シンクロってのは、チューナーモンスターとチューナー以外のモンスターを墓地へ送ることで、エクストラデッキからレベルの合計が一致する「シンクロモンスター」を特殊召喚できるっていう召喚方法なんだ。

たとえば、このスターダスト・ドラゴン。こいつはレベル合計が8になるようにすれば召喚できる」

「……な！？それなら1ターン目から強力すぎるモンスターを出せるじゃないか！！」

「そういうことだ……」

余ってるから、沼地の魔人王と、相性のいい……そうだな、デブリ・ドラゴンをやるよ。

シンクロは……余ってて使わないのならなんでもいい」

正直言って、Sinとそのほかの2つのデッキ以外は使わないからな。

というか、使えない。

・・・待てよ？ ipp そのこと持つてるE・HERO全部渡しちまうか？

たぶん、一枚だけのはないだろう。

「あ、中に入ってるHEROも全部やるよ」

「いいのか？ 随分と太っ腹じゃないか」

「何・・・使わないからな・・・そんな箱に入れとくより、使える奴に渡したほうがカードも喜ぶってことだ」

「・・・とんだデュエリスト魂だな」

「気にするな・・・使えるのは氷結界の龍トリュシーラだけか・・・」

まあ、シンクロはそんなもんか・・・」

そういつて俺は、手元にあったトリュシーラと沼地の魔人王とデブリ・ドラゴンを3枚ずつ手渡した。

「本当にいいのか？」

「いいったら、いいの。むしろもらってくれ」

「・・・そうか？ じゃあ、遠慮なくもらっておこう」

本当に、三沢はいい奴だな。

特に理由もなく信じてくれるし。

「デッキ、改造するか？」

「そうだな・・・」

とりあえずは、三沢のデッキを改造することにした。

・・・というか、三沢って意外に強いんだな。もう一回やったら3回目で負けたよ。（10回中）

第五話／三沢魔改造？（後書き）

ミニドラマ／デュエル後

「遊夜のデッキって本当にひどいよな」

「なにがだよ？」

「シンクロはいつても使えないのが多いし、融合にいたっちゃ絶対に使えないじゃないか」

「・・・気にしたら負けだろ」

「しかもさっきの手札は何だ！？あれじゃあ勝てないだろ！！」

「・・・・・・・・まあ・・・不慮の事故だ・・・・・・・・」

・・・続かない。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

今回で三沢のデッキが異常に強くなりました。

遊「V・HEROやらM・HEROやらも渡したからな」

プラスでシンクロである。
むしろチート化したかもしれん。

遊「普通に今なら負けるだろ……大抵の奴は」

だろうなww

||||||||||||||||||||

遊「今回も見てくれてありがとう」

なすび様、ゼクスユイ様、sirasu様、語り部様、感想ありがとうございます。

プレイングミスも訂正させていただきました。

遊「次回もまた会おうぜ。

感想なんかもドシドシ送ってくれよ！」

ではノシ

第六話／VS十代 前編（前書き）

今回は十代君とのデュエルで前編後編でわかれております。
そして、序盤でオリキャラが二人出てきます。

遊「なんか濃いな・・・」

気にしたら負けだよ。
では、本編どうぞ。

第六話／VS十代 前編

??? SIDE

試験のとき……あの人はSinを使っていた……。

「結城遊夜……」

原作にはいなかった異常。
イレギュラー

多分彼も転生者だろう。

私は俗に言うトリッパーという奴だ。

前世では地味なオタク高校生だったが、気が付いたらこの世界にいた。

親などはいなく、ずっと一人でいて、誰にも興味を持つことはなかった。

これは前世からである。

「結城、遊夜……」

気になる……。彼のことか……。凄く……。

いったいどんな人なんだろうか……。楽しみだなあ……。

??? SIDE OUT

??? SIDE

よう！この作品を見てる皆！転生オリ主のキラ・不同だ。

実は俺は俗に言う転生者という奴で、前世はただのデブオタだった。だが今は銀髪オッドアイだぜ！

遊戯王の世界だと知ったときは微妙な気分だったがよく考えるとこの世界も美少女が多いってことに気が付いた。
明日香とかレイとかな…………。

フフフフ、彼女たちとの甘い生活を考えているだけで気分がよくなる。

待ってろよ、俺のハーレム人生！！

不同SIDE OUT

遊夜SIDE

……何か凄くいやな予感がする。
……まあ気にしたら負けか。

「お……………い！！遊夜！今度こそデュエルしようぜ……………！」

「ん……………？十代か。まあ、約束してたからな、いいぞ」

「よっしゃ、じゃあ放課後レッド寮前まで来てくれよ！」

「ん、わかった」

放課後にレッド寮ね。了解了解。

「……………君も挑まれたのか」

「おう、三沢。元気か？」

「いや、あの後渡されたカードで組んだデッキを回したり戦術を考
えていたら寝過ごしてしまっただけ。」

実はまだ眠いんだ」

「・・・それは大変だな」

「君も放課後レッド寮に行くのだろう？俺も一緒に行くよ」
「わかった」

三沢も誘われたのか・・・○

十代って本当にデュエルが好きなんだな。

放課後か……。本当に待ち遠しいな……。

放課後

あのはは普通は時間が過ぎ放課後。

出来るだけデツキも調整したので大丈夫……のはずだ。

正直言つて十代のチートドロ―は俺の予想を大幅に上回るはずだ。何とかしないと勝てる確立は大幅に下がる。

「まあ……やるだけか」

「お！来たな、遊夜！デュエルだ！！」

「ああ……準備はいいか？」

「バッチリだぜ!!」

「よし、いくぞ……」

「^{デュエル}決闘!!」

十代…4000
遊夜…4000

「先行は俺がもらうぜ!俺のターン!ドロー!」

十代が先行か。…一体何を引いたんだ?

「俺は融合を発動!手札のE・HEROウィングマンとE・HEROバーストレディを融合して、
E・HEROフレイム・ウィングマン(攻2100/守1200)を召喚!」

「な!?!いきなり正規の融合召喚!?!?」

いくらなんでも…いや、知っていても納得は出来ない。

そんな簡単に手札に揃ってたまるものか。

でも、流石十代と言うべきであろう。その無理を何処かへ飛ばしてしまうのだから。

「カードを伏せてターンエンドだ」

十代

LP…4000

手札…2枚

場…モンスター…E・HEROフレイム・ウィングマン ×1

伏せカード…1枚

「つく!俺のターン、ドロー!」

引いたのはS i nブルーアイズ。

今回はコイツか。

手札にあるのは歯車街・・・よし！

「俺はフィールド魔法歯車街を発動！」

辺りが屋上に歯車の付いた家が並ぶ街に変化した。

「またフィールド魔法か！！今度は何を見せてくれるんだ？」

「まあ、見てな！」

俺はデッキから青眼の白龍ブルーアイズ・ホワイトドラゴンを除外してS i n青眼の白龍ブルーアイズ・ホワイトドラゴン（攻3000／守2500）を特殊召喚！！」

「ぶ、ブルーアイズ！？」

「そうだ。このカードでお前のE・HEROフレイム・ウィングマインを攻撃！滅びの爆裂疾風弾！！」バーストストリーム

「だけど！罨発動！ヒーローバリア！自分フィールド上に「E・HERO」と名のついたモンスターが

表側表示で存在する場合、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする」

「っち！俺はカードを伏せてターンエンドだ」

遊夜

LP…4000

手札…2枚

場…モンスター…S i n青眼の白龍 ブルーアイズ・ホワイトドラゴン ×1

伏せカード…2枚

「俺のターン、ドロー！」

遊夜、ヒーローには相応しい舞台があるんだぜ！俺は摩天楼―スカイスクレイパーを発動するぜ」

俺の場のフィールドが壊れ、ヒーローの舞台が出来る。

「この瞬間、俺は歯車街の効果とSin青眼の白龍ブルーアイズ・ホワイトドラゴンの効果を発動！デッキから古代の機械巨竜アンティークギア・ガジェルドラゴン（攻3000／守2000）を特殊召喚！

そしてSin青眼の白龍ブルーアイズ・ホワイトドラゴンは場のフィールド魔法が破壊されたとき破壊される！」

「っへ！でも倒すぜ！フレイム・ウィングマンで古代の機械巨竜アンティークギア・ガジェルドラゴンに攻撃！スカイスクレイパー・シュート！！」

「その瞬間！速攻魔法リミッター解除発動！」

E・HEROフレイム・ウィングマン 2100↓3100
アンティークギア・ガジェルドラゴン
古代の機械巨竜 3000↓6000

「っく！」

十代 4000↓1100

「俺はカードを伏せてターンエンド」

「このターンのエンドフェイズ時にリミッター解除の効果でガジェルドラゴンは破壊される」

十代

LP…1100

手札…1枚

場…モンスター…なし

伏せカード…1枚

遊夜

場…モンスター…なし

伏せカード…1枚

これで場はほとんどなくなった。

「俺のターン、ドロー！」

俺は1000ポイントのライフを払い、伏せカードスキルドレインを発動！」

遊夜 4000↓3000

「俺はエクストラデッキのサイバーエンドを除外してSinサイバー・エンド・ドラゴン（攻4000／守2800）を特殊召喚！スキルドレインで自壊効果は無効化される！そして、俺は2枚目の歯車街を発動する」

これが今の最高の布陣だ。

「バトル！ Sinサイバー・エンド・ドラゴンでダイレクトアタック！！」

「この瞬間にリバーカード攻撃の無効化！これでこのバトルは終了だぜ」

「つく！ターンエンドだ」

次回に続く。

第六話／VS十代 前編（後書き）

今回のキーカードは『スキルドレイン』。

《スキルドレイン／Skill Drain》

永続罠

1000ライフポイントを払って発動する。

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化される。

遊「こいつは強力だな。Sinの効果が無効にするから、攻撃抑制、自壊能力とかを無効に出来るからな」

こいつが出てくるとSinと別なモンスターの攻撃が可能だからね。

遊「ただ、他の効果も無効化される点に注意だな」

今回も荒れたな。

遊「まさか、あそこで止められるとは思わなかった」

次回に期待だね。

遊「勝てるといいが……」

|||||

今回も見てくださいありがとうございました。

遊「sirasu様、ゼクスユイ様、感想ありがとうございます」

使ってほしいデッキ、コラボなんかはいつでも受け付けています。
どちらも番外扱いになりますが、必ずやらせていただきます。

遊「誤字・脱字、プレイングミスなどの訂正、感想なんかも待ってるぜ！」

次回もお楽しみに！！

第七話／VS十代 後編（前書き）

前回に引き続きVS十代君です。

遊「楽しんでみていってくれよ」

では、本編へGO！

第七話／VS十代 後編

前回までの状況

十代

LP…1100

手札…一枚

場…モンスター…なし

伏せカード…なし

遊夜

LP…3000

手札…0枚

場…モンスター…Sinサイバー・エンド・ドラゴン

伏せカード…なし

魔法・罠…スキルドレイン

—————

「俺のターン、ドロー！」

なあ、こんなデュエルが出来るなんて楽しくてたまらないぜ！」

おいおい・・・この状況を楽しむデュエリストだあ？

アニメでも見たが信じられないな。俺なら諦めるぜ。

「俺は天よりの宝札を発動！お互い手札が6枚になるようにドローするぜ！」

まさかのここでアニメ効果版のカードですか!?
これはやばいぞ……。

十代 1枚↓6枚
遊夜 0枚↓6枚

「俺はサイクロンでそのスキルドレインを破壊するぜ!」
「な!?!」

「そして俺は強欲な壺を発動して2枚ドロー! 天使の施しを発動して3枚ドローして2枚捨てる。

……これでそろったぜ!」

「つく……俺は手札断殺をチェーンして発動!」

十代 6枚↓4枚↓7枚
遊夜 6枚↓4枚↓6枚

「俺は手札から融合回収を発動! ウィングマンと融合を手札に加えるぜ!

更に貪欲な壺を発動! フレイムウィングマン、バーストレディ、スパークマン、クレイマン、バブルマンをデッキに戻してシャッフル、そして2枚ドロー!

行くぜ遊夜! 融合発動! 手札のウィングマンとバーストレディを融合してフレイム・ウィングマンを召喚!」

場に再び、十代のフェイバリットカードが呼び出される。

「そして2枚目の融合を発動! フレイム・ウィングマンと手札のスパークマンを融合してシャイニング・フレア・ウィングマンを召喚!」

「な!?! 2枚目の融合だ?!」

「ああ、お前の手札断殺のおかげで引けたぜ」

「だ、だが、その攻撃力では俺のSinサイバー・エンドには届かない！」

「さっきも言ったけどな、ヒーローにはヒーローに相応しい舞台があるんだよ・・・フィールド魔法、摩天楼―スカイスクレイパーを発動！」

舞台が、またあのビル街に変わっていく。

「さっきと同じように効果でSinモンスターには消えてもらおうぜ！」

「だが、そうはさせない！俺は手札のSinトゥルース・ドラゴンの効果を発動！自分フィールド上に表側表示で存在する「Sinトゥルース・ドラゴン」以外の「Sin」と名のついたモンスターが戦闘またはカードの効果によって破壊された場合、ライフポイントを半分払う事で、このカードを手札または墓地から特殊召喚できる！」

俺はライフを半分払い、Sinトゥルース・ドラゴンを特殊召喚！！！」

遊夜 3000↓1500

俺の場に、黄色っぽい色をした体を持つ、このデッキの真のエースモンスターが現れた。

「攻撃力5000・・・？」

「ああ・・・俺のデッキの真のエースにて切り札だ。」

見せてみる十代。どうやってコイツを超えるのかを」

「つく・・・クレイマンを守備表紙で出して、ターン・・・エンドだ・・・」

流石にコイツの前では何も出来ないか……。だが、余裕は見せない。コイツの前で余裕を見せてはいけない。

「今回は勝たせてもらう！俺のターン！ドロー！」

引いたカードはSinパレルギア。手札にはあれがある……。いける！

「俺はメテオ・ストライクをSintウルース・ドラゴンに装備！これで終わりだ！Sintウルース・ドラゴンでクレイマンを攻撃！」

十代よ安心して、終わりだといっただろう？

「メテオ・ストライクの効果発動！装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える！」

「な！？クレイマンの守備力は……」

「2000、よって超えた分の3000ポイントのダメージを受けよう！」

「そんなのありかよ」

「行け！Sintウルースドラゴン！トゥルーエンド真実の終わり！！」

「うわあああああああ！！」

十代 1100↓-1900

「今回は俺の勝ちだな」

「あんなの反則くさいぜ」。

「……でもまあ、」

「お前流に言えば・・・ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ？」

「セリフ取るなよ！」

「悪かったって・・・でも楽しかったぜ」

「ああ、またデュエルしようぜ！」

「ああ」

こうしてこのデュエルは俺の勝利で幕を閉じたのである。

でもまあ、あのときの天よりの宝札で来なかったら負けてたな。

「まあ・・・いいか」

「うん？何がだ？」

「気にするな・・・ただの独り言だ」

「そうか？」

・・・ただ、こんなデュエルも・・・・・・悪くは無いかな。

俺は、平和で少し騒がしいな日常のなかで、ふとそう思った。

第七話／VS十代 後編（後書き）

今回の最強カードは『Sin トウルース・ドラゴン』だぜ！！

《Sin トウルース・ドラゴン》

効果モンスター

星12／闇属性／ドラゴン族／攻5000／守5000

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在する「Sin トウルース・ドラゴン」以外の

「Sin」と名のついたモンスターが戦闘またはカードの効果によって破壊された場合、

ライフポイントを半分払う事でのみこのカードを手札または墓地から特殊召喚できる。

「Sin」と名のついたモンスターはフィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

遊「俺のデッキの真のエースカードで切り札だぜ！」

攻守5000の上、モンスターの破壊効果を持つ文字通り最強のモンスターだ。

遊「ただ、召喚にはトリガーとなるS i nモンスターの破壊とライフが半分必要だ」

その分、上で言ったような破格の能力を持っているがな。

遊「流石は俺のエースだぜ!!」

――――

今回はギリギリだな。

遊「ああ、本当に強いな、十代は……。

っていうか、あそこでシャイニング・フレア・ウィングマンを出しているのかよ!？」

大丈夫だ……ミラクルフュージョンを出してないからな……
・・多分。

遊「多分かよ!？」

――――

今回も見てくださってありがとうございます。

遊「S i r a s u様、F O O L様、深淵様、感想ありがとうございます

ます。

こんな作者の作品に感想・訂正を書いてくださって」

sirasu様、デッキのほうは必ず使いますので、ご了承を。

その他使ってほしいデッキ、コラボなんかはいつでも受け付けています。

どちらも番外扱いになりますが、必ずやらせていただきます。

遊「誤字・脱字、プレイングミスなどの訂正、感想なんかも待つてるぜ！」

次回もお楽しみに！！

—————

普通はプレイングミスなんかの訂正を待つっていやじゃないかな？

遊「実際2連続であつたんだから仕方ないだろ？」

面目もございません・・・。

第八話／深夜のデュエル VS 転生者!?(前書き)

今回は・・・長いな。

遊「詰め込んでるからな」

まあ、いいや。

本編どうぞ。

遊「投げやり!?!」

第八話／深夜のデュエル VS 転生者!?

どうも、結城遊夜です。

あのデュエルから1日が過ぎました。

俺は今、部屋で三沢とデュエルについて話している。

「うーん・・・これは必要ないんじゃないか？」

「そうか？でも、Sin使うから意外と必要なんだが・・・」

「いやでも、3枚積みじゃなくてもいいんじゃないか？どっちかって言うところのD・D・クロウの方がいいんじゃないか？」

「うーん・・・それもいいかな・・・」

仕方なしに俺は終末の騎士を2枚抜き、D・D・クロウを入れた。

うう・・・ゴメンよ・・・。

「・・・そんなに落ち込むなよ・・・」

「だって前からこの構築だったんだぜ・・・愛着だって湧くさ・・・」

「そうか・・・」

そんなこんなで話をしていたところに十代から連絡が来た。

「遊夜、大変だ!! 翔がさらわれた!!」

「はあ!？」

「一応三沢にも連絡しといってくれないか？俺は俺で探してみる」
「わかった」

それだけを言うと電話は切れた。

とりあえず、纏めようか。

翔がさらわれた。

・・・うん、それしかわからないね！
とりあえず、三沢に教えておくか。

「三沢・・・驚かずに聞いてほしい」

「何だ？」

「翔が・・・さらわれた」

「なにい！？」

「俺はこれから探しに行こうと思うが、三沢はどうする？」

「俺も同行させてもらおう」

「んじゃ、待っててくれない？ デッキとか一応持ってくから」

「わかった」

今回は翔の誘拐・・・ってことは・・・。

明日香とのデュエルか？

・・・一応こっちのデッキも持っていくか・・・。

俺は、普段使わないほうのデッキもケースに入れて、部屋を出た。
そこにいた三沢と話しながら歩き始める。

「・・・準備は出来たか？」

「ああ」

「行くぞ？ まずはどこから探すか・・・」

「ブルー寮付近を捜そう。とりあえずは翔の兄貴に聞けばいいだろ」

「そうか、誘拐なら肉親に連絡や要求が行くはず・・・！」

「ああ」

いや、場所はわかるんだよ？

でもさ、いきなり女子寮とか言ったらはあ？とか言われるに決まってるじゃん。

（移動中）

とりあえず、寮に着いたわけだが……。

「すまない、カイザーに用があるのだが……」

「……それで出てきてくれるのか？」

「……正直言って自信は無い……」

「ないのかよ!？」

いや、ねえ？

いきなり用があるっていつて出てきたら苦労はしな……「何のようだ?」……出てきちゃったあああああああ!？」

「……出てきたな」

「ああ……」

「俺は何のようだと聞いているんだが？」

おっと……本題に入るか。

「翔……アンタの弟がさらわれたと聞いたからな……誘拐なら肉親のあんたに連絡が来るだろうと思って来たんだが……」

「生憎と連絡なんぞ来てはいない」

「そうか……迷惑かけたな」

「フ．．．気にするな。それよりも、結城だったな？」

「え？」

「今度俺とデュエルしてほしい」

「「え!？」」

俺が．．．カイザーとデュエル？

「何．．．お前がサイバー・エンドを持っていて、特殊なモンスターを使っていると聞いたのでな．．．」

「は、はあ．．．問題ないですけど．．．」

「では、後日、都合のいい日を教えてくれ」

「え？あ．．．とりあえず、おやすみ」

「ああ」

そう言ってカイザーは中に入っていた。

ってか！カイザーに目をつけられたけど！？あの天然チートに勝てるのか俺!？

「ここにはいないか．．．」

それにしても遊夜、カイザーとデュエルなんて羨ましいな」

「そうか?．．．とりあえず、次はどこに行くか．．．と言って
も女子寮しか残ってないが．．．」

どうするかねえ？

そう思っていると十代からメールが届いた。

「翔見つけたわ。女子寮にいたよ／＼(^ o ^)／」

「今更かよ!？」

「どうした？」

「翔、女子寮にいたって・・・とりあえず、行こうか」
「え？ ああ」

一応、急ぐか・・・。

～移動中～

「ゼエゼエ・・・意外と・・・遠いんだな・・・」
「あ、ああ・・・まったく・・・だな・・・」

到着後、俺たちは息がすっかり上がってしまった。
てか、遠すぎるだろ女子寮！？

「・・・E・HEROサンダー・ジャイアントでダイレクトアタ
ック！！ボルティックサンダー！！」

「キャアアアアアアアアアアアアア！！」

・・・ってあれ？もう終わった系？

「ガッチャ、楽しいデュエルだったぜ！」

「約束だから丸藤君は返すわ・・・」

翔が返されている様子を見た俺らは思った。

「「・・・これって俺ら来た意味あるのか・・・？」」

む・・・何気にハモったな。

・・・別に気にしないが。

「なあ・・・帰るか？」

「ああ、そうだな・・・まったくの無駄だったようだ」

俺らは軽く話をして帰ろうとしたが、途中で透き通るような黒い髪の少女が現れて俺らの行く手を遮った。

「待ちなさい！私は君に興味があるんだよねー結城君？」

ッゲ！目標は俺かよ・・・。

さっさと帰って寝たいのに・・・。

「私とデュエルよ！」

「あ？俺は眠いの。また後日ねー」

俺はそう言ってその場を去ろうと思ったが、そうは問屋がよろさなかった。

「今すぐデュエルよ！」

「えー」

「ほら早く！！」

っち、煩い奴だ・・・。速攻ブッ倒してやる・・・！！

「いいだろう。デュエルだ」

「やっと、その気になったのかな？・・・まあいいや」

「^{デュエル}決闘！！」

「先行はもらうわ！私のターン！ドロー」

あいつのデッキは何だ？別になんでもいいが・・・。

「私は手札のカード一枚を墓地に送り、チューナーモンスター、クイックシンクロン（攻700／守1400）を特殊召喚！」

そうすると、相手の場にテングロンハットを被った、青い機械が現れた。

あれは・・・！！？

「「「「チューナー？」」」」

他の皆が驚いているが俺と三沢は違った。

「チューナーだと！？」

「なぜそのカードを持っている？」

「さあね？それは君が一番知ってるんじゃないかな？・・・私は墓地のレベルスティーラー（攻600／守0）の効果を発動。クイックシンクロンのレベルを1つ下げて特殊召喚するわ」

クイックシンクロン ☆5↓4

「そして、ボルトヘッジホッグ（攻800／守800）を召喚！」

そして私は、レベル1のレベルスティーラーにレベル4となったクイックシンクロンをチューニング！！」

☆1＋☆4＝☆5

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！いでよ、ジャンク・ウォリアー（攻2300／守1300）！」

「シンクロ召喚？」

「シンクロ召喚は、チューナーモンスター1体とチューナー以外のモンスターを、墓地へ送る事で、その合計が等しいシンクロモンスターを、

融合デッキから特殊召喚する事ができる。それがシンクロ召喚だ」

ナイス説明だ、三沢。

あいつのことは今度から三沢の異名は歩く遊戯王ウィキに決定だな。

「このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップするわ！

パワー・オブ・フェローズ！」

ジャンク・ウォリアー 2300↓3100

「カードを伏せてターンエンドよ」

???

LP…4000

手札…1枚

場…モンスター…ジャンク・ウォリアー ×1

ボルト・ヘッジホッグ ×1

伏せカード…2枚

「俺のターン！ドロー」

場には2枚の伏せカード、ジャンク・ウォリアー。
さて・・・どうするか・・・。

「俺は手札の歯車街を発動！エクストラデッキからサイバー・エン

ド・ドラゴンを除外して、Sinサイバー・エンド・ドラゴンの特
殊召喚！」

「出たわね・・・Sinモンスター・・・」

「バトル！Sinサイバー・エンド・ドラゴンでボルト・ヘッジホ
ッグを攻撃！エヴォリューションバースト！！」

「罨発動！くず鉄のかかし！その攻撃は無効よ！」

「っち！・・・カードを2枚伏せてターンエンド」

遊夜

LP…4000

手札…2枚

場…モンスター…Sinサイバー・エンド・ドラゴン ×1

伏せカード…2枚

魔法・罨…歯車街

「私のターン、ドロー！」

「・・・このデッキは遊星のデッキか？

でも、前は2枚あったスターダストが1枚になってたからあいつは
持っていないよな？

そうであってくれ。

「私は・・・」

「永続罨発動！スキルドレイン！！」

遊夜 4000↓3000

ジャンク・ウォリアー 3100↓2300

「つく！私はモンスターを守備表示にしてターンエンド」

「その瞬間！月の書を発動！Sinサイバー・エンド・ドラゴンを裏側守備表示にする！」

「な！？どうして！？」

「ふ、見てな・・・」

「??？」

LP…4000

手札…1枚

場…モンスター…ジャンク・ウォリアー ×1

ボルト・ヘッジホッグ ×1

伏せカード…2枚

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードは・・・ナイスタイミングだ。

「俺は強欲な壺を発動、デッキからカードを2枚ドローする！」

そして、天使の施しを発動！カードを3枚ドローして2枚捨てる！」

遊夜 2枚↓1枚↓3枚↓6枚↓4枚

「来たああ！俺は2枚のサイクロンを発動！その伏せカードを破壊させてもらうぜ！」

そして俺はデッキから青眼の白龍を除外して、Sin青眼の白龍（攻3000／守2500）を特殊召喚する！」

「あ・・・」

「ミラーフォースもあつたか・・・危ない危ない」

そう、スキドレを発動して月の書で裏側にしてしまえばSinは大

量展開だって出来るのだ！

これが最強の必勝タクティス！！

「Sin青眼の白龍！滅びの爆裂疾風弾^{バーストストリーム}！！」

「うう……」

これでジャンク・ウォリアーは破壊された。
これでいける？

「カードを伏せてターンエンド」

遊夜

LP…3000

手札…1枚

場…モンスター…裏守備表示モンスター ×1

Sin青眼の白龍 ×1

伏せカード…2枚

魔法…罨…齒車街

スキルドレイン

「わ、私のターン！

私は強欲な壺を発動！2枚ドロー！！」

???

1枚↓3枚

「私は大嵐を発動！」

「残念だがライフを半分払い神の宣告を発動、無効化させてもらう」

遊夜 3000↓1500

「うう・・・なら、光の護封剣を発動！」

「効果でSinサイバー・エンド・ドラゴンが表側表示になる」

「う、ううう・・・で、でも！3ターンは攻撃できないよ！」

「終わりか？」

「ターン・・・エンド・・・」

???

LP・・・4000

手札・・・1枚

場・・・モンスター・・・ボルト・ヘッジホッグ ×1

伏せカード・・・なし

魔法・罠・・・光の護封剣（0ターン）

「俺のターン。カードを伏せて、ターンエンド」

遊夜

LP・・・3000

手札・・・1枚

場・・・モンスター・・・Sinサイバー・エンド・ドラゴン ×1

Sin青眼の白龍 ×1

伏せカード・・・2枚

魔法・・・罠・・・歯車街

スキルドレイン

今は様子見だ。

とはいえ、次で決めるつもりだが。

流石にそろそろ危なくなってきた・・・主に眠気で。

「私のターン！私は手札を一枚捨ててクイック・シンクロンを特殊

召喚！

レベル2ボルト・ヘッジホッグにレベル5クイック・シンクロンをチューニング！！」

☆2+☆5=☆7

何だ？何を出す気だ？

「集いし怒りが忘我の戦士に鬼神を宿す。光さす道となれ！シンクロ召喚！吠えろ、ジャンク・バーサーカー（攻2700／守1800）！」

「な！？バーサーカー！？

・・・てかそれ全部覚えてるのか？」

「う、五月蠅い！」

「買発動！Sin Claw Stream！そのジャンク・バーサーカーを破壊する！

ま、破壊しようがしまいが効果は使えないけどな」

「う・・・ターンエンド」

???

LP…4000

手札…0枚

場…モンスター…なし

伏せカード…なし

魔法・罠…光の護封剣（1ターン）

「俺のターン！ドロー！

俺は罠カード！サンダーブレイクを発動！手札を一枚捨て、その光の護封剣を破壊する」

「あ、ああ・・・」

「これで、チェックメイトだ。」

Sinサイバー・エンド・ドラゴン、Sin青眼の白龍でダイレ
クトアタック！エヴォリユーションバースト！滅びの爆裂疾風弾！
！」

「きゃあああああああああああああ！！」

???
4000↓—3000

デュエルは終わったが気になることがある・・・。

「終わってからで悪いが・・・君の名前は？」

「「「「「「今更！？」」「」「」「」」

第八話／深夜のデュエル VS 転生者！？（後書き）

今回の最強カードは『ジャンク・バーサーカー』！

《ジャンク・バーサーカー／Junk Berserker》

シンクロ・効果モンスター

星7／風属性／戦士族／攻2700／守1800

「ジャンク・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター1体以上
自分の墓地に存在する「ジャンク」と名のついたモンスター1体を
ゲームから除外し、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して
発動する。

選択した相手モンスターの攻撃力は、除外したモンスターの攻撃力
分ダウンする。

また、このカードが守備表示のモンスターを攻撃した場合、
ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する。

コイツの効果はキツイな……。

遊「流石のSinでも攻撃力を下げられたり問答無用で破壊される
のには弱いからな」

これでジャンク・ガードナーが揃った時には……。

遊「やめろ、あれはトラウマものだ……。」

正直死ねる。

――――

遊「結局、あの転生者名前出てこなかったな……」

そうだね。

遊「どうするんだよ？」

次回には出す……と思う。

遊「思つかよ!？」

――――

遊「今回も見てくれてありがとう」

??「おかげさまでアクセス10000越えだよ!」

遊「何処から入ってきたんだ？」

??「秘密だね」

遊「そうか……」

なすび様、sirasu様、深淵様、自分不器用ですから様、感想ありがとう」

・・・誤字・脱字、プレイングミスは甘んじて受け入れます。

遊・?? 「作者居たの？」

使用してほしいデッキ、コラボなんかも受け付けております。

デッキですが・・・出来る限りはやってみますが、出来ない場合は
すいません。

一部のデッキは、場合によっては他のキャラクターに使わせるかも
しません。

遊・?? 「無視!？」

では、次回また会いましょう。

あと、感想も待ってます。

遊・?? 「バイバイ」

※スキルドレインの効果でジャンク・バーサーカーの効果も無効に
なっていましたね。忘れてました。

深淵様訂正ありがとうございます。

第九話／月一試験 前日（前書き）

今回は月一試験前日までです。

遊「キャラの崩壊がヒドイ・・・・・・・・」

そして遊夜の運の悪さについて・・・。

遊「不幸だ・・・・・・・・」

本編どうぞ。

第九話／月一試験 前日

翔の誘拐事件も終わって、早数日……。あれから特に変わったことは無い。あるとすれば……。

「遊夜、ご飯食べに行こ？」

「コイツ、櫻井加奈と少し仲良くなった位か。……てかやっと名前でたな。」

「ん？ いいぜ」

「じゃ、行こっか♪」

「ああ……」

俺らはとりあえず、購買に行くことにした。

「そういえば、明日は月一試験だけでも勉強とかは大丈夫……って心配はいらないか」

「ああ、後は実技だけだ……。って事で放課後は前世でやったLP8000でデュエルしようぜ」

「うーん……。偶にはやりたいから……。いいよ」

「サンキュ……。さーと、今日はドローパンを食べるか」

今まで食べた回数は10。

その中で黄金の卵パンは……。ない。

一回目、激辛カレーパン……。地獄を見た。

懲りずに二回目、アボカドパン……。なんつー微妙なもん入れてん

だと思った。

三回目、納豆パン・・・パンには合わないと思った。

四回目、二度目の激辛カレーパン・・・やっぱり地獄を見ました。

口直しに五回目、卵パン・・・普通においしくてよかった。

六回目、サラダパン・・・普通のでよかったとほっとした。

七回目、またしても激辛カレーパン・・・またお前かと思った。

八回目、ハンバーグパン・・・ハンバーガーみたいでおいしかった。

九回目、激辛カレーパン・・・お前はどれだけ俺を苦しめたいんだ
と思った。

口直しの十回目、またしても激辛カレーパン・・・死ぬかと思った。

・・・てか、こうしてみると地獄を見すぎな俺。

やっぱ神様俺のこと嫌いだろ。

「ドロー！」

金を払い一個パンを取る。

早速開いて食べた。・・・こ、これは・・・！！？

「うますぎる・・・！これが黄金の卵パンだというのか！！」

「いきなり何！？」

「これ、食べてみるよ。うまいぞ！」

十一回目の正直。

やはり神は俺を見捨てなかった・・・ありがとう神様！！

「美味しい！」

「だろ？」

こうして俺の昼食はとても満足したものとなった・・・。

夜はカレーである、まる。

『おまけ／その晩』

くレッド寮く

「ZZZ・・・」↑十代

「明日のテストでいい点取れますように・・・！」↑翔

「テストよりも遊夜のカードのほうが気になるんだなあ・・・」↑
隼人

駄目だ、マシな奴がない。

く同時刻イエロー寮く

「ハハハハハハハ！明日が楽しみだ！」↑三沢

「余裕余裕」↑遊夜

・・・三沢のキャラが崩壊した。

く同時刻ブルー寮く

「待っているドロップアウト！必ずやこの雪辱は果たしてやる・・・！！」↑万丈目

「テストなどつまらんな・・・」↑カイザー

カイザーがサボタージュしちゃいそう。

く同時刻女子寮く

「フフフフフ．．．．」 ↑明日香

「うゝん．．．」 ↑加奈

「遊城．．十代．．．．」 ↑ももえ

「どうしたのよももえ!？」 ↑ジュンコ

．．．どうしてそうなった．．．．。

第九話／月一試験 前日（後書き）

ミニドラマ／その後の成績^{ドローパーン}

十一回目、黄金の卵パン

十二回目、激辛カレーパン

十三回目、激辛カレーパン

十四回目、激辛カレーパン

十五回目、激辛カレーパン

十六回目、激辛カレーパン

十七回目、具なしパン

十八回目、具なしパン

十九回目、海老フライパン

二十回目、激辛カレーパン

――――

遊「ふ、不幸だあああああああああああああああ！
」

どうしてデュエルではあんなに引けるのにドローパーンは……。

遊「神様なんて嫌いだ……」

――――

今回も見てくれてありがとうございます。

遊「（ズーン）……………」

遊夜も落ち込んでないで、さあ。

遊「・・・無限の剣製作者様、sirasu様、クラウン様、深淵様、ゼクスユイ様、感想ありがとうございます」

誤字・脱字・訂正・感想はいつでも受け付けております。

ただし、自分が荒らしだと思った場合は即刻削除させていただきますのでご了承を。

遊「また次回会おうぜ……………」

第十話／月一試験 VS またまた転生者!?! (前書き)

今回はやっと月一試験です。

遊「意外と長かったな」

そう言わないで……。

遊「まあ、いいか」

え? いいの?

遊「作者が作者だから諦めた」

ひ、ヒドイ……。

では、本編、どうぞ!

第十話／月一試験 VS またまた転生者!?

・・・翌日、月一試験当日。

朝、俺と三沢は走っていた。

「クソ！こんなときに寝坊するなんて！あれか！？昨日黄金の卵パ
ンを引いて運を全部使い切ったのか！？」

「君はなぜあんなにも寝起きが悪いんだ！」

「知るかあああああ！！！」

アカデミアへ向かう途中、十代がお婆さんと何かが乗っている荷台
を押しているのが見えた。

あんながんばっている姿を見ると、手伝わざるを得ないじゃないか。

「三沢！俺は荷台を押す！お前は先に行ってくれ」

「遊夜がやるなら俺も手伝おう・・・十代！俺たちも手伝おう！」

「マジでか！？サンキュー！！！」

「君たちも手伝ってくれるのかい？本当にありがとう」

「気にしないでくれ」

「大丈夫です」

俺らはこのまま、お婆さん（仮）を丘の上の平坦な道まで送った後、
アカデミアを目指した。

到着したところには既に残り三十分だった。

「十代君、大地君、遊夜君、十五分の遅刻だにゃ」

「「「すいません」」」

「早く席についてテストを受けるのだにゃ」

俺はすばやく席についてテストを始める。
簡単なものだからか、すべての教科がそう時間がかからずに終わった。

「そこまでだにゃ。実技試験は午後二時から始めるのにゃ」

うし！デッキは・・・今回は久しぶりにこっちを使うか。

・・・このギミックは好きだからな。ファンデッキにしては強いし。

「遊夜！パック買いに行こうぜ」

「待ってろ、今行く」

デッキとディスクを持って立ち上がり、十代たちのほうへ向かった。

「翔と十代はテスト、自信あるか？」

「全然」

「じゃ、実技で頑張るってか」

「そうッスね」

「どんなデュエルでも楽しむだけだぜ」

「そうか」

ならよしとするか・・・ん？

俺らが話しながら購買のほうへ行くと、そこには明日香の取り巻きの一人・・・たしか、ももえだったかな？

「十代さん、よろしければ、ご飯をご一緒しませんか・・・？」

「ん？いいのか！？」

「え、ええ」

「さんきゅー」

ふーん・・・あれは・・・。

「（もしかして十代に惚れちゃったのか？）」

「（そうみたいッス）」

「（ふーん・・・）」

これはまあ・・・ビックリな展開だな・・・。

将来の修羅場が目に見えかぶ。

まあ、手伝いくらいは頼まれたらやってやるか・・・。

それから数十分後

やっと試験の時間か。

デッキの準備も万端だ。たぶん負けはない。

「結城遊夜、フィールドに出るのゝネ」

・・・早速俺の番か。大丈夫、いけるさ。

「ふ・・・転生オリ主の俺の相手はお前のようなモブか・・・。

ああ、そう悲観することはない、どうせ負けるだろうが、俺と戦えたことを誇りに思うんだな」

ウゼエ・・・メツチャウゼエ・・・。

「・・・言いたい事はそれだけか？」

「あ？」

「言いたい事はそれだけか、と聞いている」

「ハン！まあ、いい。さっさと倒して終わらせてやるよ」

「^{デュエル}決闘（！）」

「先行は俺がもらうぜ！俺のターンドロー！」

正直言ってもいい。勝つのは俺だからな。

ああいうのは見ててむかつく。

「俺は未来融合―フューチャー・フュージョンを発動！F・G・Dを選択、真紅眼の黒竜と真紅眼の飛竜とマテリアルドラゴンとミンゲイ・ドラゴンを二体墓地へ送る。」

俺は黒竜の雛（800／500）を召喚、そして除外してレッドアイズ・ダークネス・メタルドラゴン（攻2800／守2400）を特殊召喚！

効果で真紅眼の黒竜（攻2400／守2000）を特殊召喚！
カードを伏せてターンエンド！お前のターンだぜモブ！」

転生者

LP…4000

手札…1枚

場…モンスター…真紅眼の黒竜 ×1

レッドアイズ・ダークネス・メタルドラゴン ×1

伏せカード…1枚

「ああ終わったな……」とか聞こえるけどもまだまだだぜ。
このデッキの力を見せてやる。

「俺のターン、ドロ―」

手札は・・・よし。

「相手の場にモンスターがいて、自分の場にモンスターがいないとき、このカードは特殊召喚できる。」

来い！TGストライカー（攻800／守0）！」

「TGだど！？」

「更にレベル4以下のモンスターが特殊召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。」

カモン！TGワーウルフ（攻1200／守0）！」

これで場はそろった。

「更に俺は、TGサイバー・マジシャン（攻0／守0）を召喚！レベル3TGワーウルフにレベル2TGストライカーをチューニング！」

「チューニング？」とかいってるけど無視無視。

☆3+☆2=☆5

「シンクロフライトコントロール！リミッター解放、レベルファイブ！ブースター注入120%！リカバリーネットワーク、レンジ修正！オールクリアー！GO、シンクロ召喚！カモン、TG パワー・グラディエイター（攻2300／守1000）！」

「シンクロ召喚だど！？なぜそれを！」

「TGサイバー・マジシャンは「TG」と名のついたシンクロモンスター、シンクロ素材とする場合、手札の「TG」と名のついたモンスターを他のチューナー以外のシンクロ素材にする事ができる。」

俺は手札のレベル4TGラッシュ・ライノにレベル1TGサイバー・マジシャンをチューニング！」

☆4＋☆1＝☆5

「今度は何を召喚する気だ！」

「リミッター解放、レベル5！ブースターランチ、OK！インクリネーション、OK！グランドサポート、オールクリアー！GO、シンクロ召喚！カモン、TG ワンダー・マジシャン（攻1900／守0）！」

俺の場に、斧を持った屈強な機械と融合している男と、ピンクの髪を持つ機械と融合した女が現れた。

「このカードは召喚に成功したとき、相手のフィールド上の伏せカードを破壊できる！」

まだまだ終わらないぜ！」

「ま、まさか……」

「そのまさかだ！レベル5TGパワー・グラディエーターにレベル5TGワンダー・マジシャンをチューニング！！」

☆5＋☆5＝☆10

「それは……」

「リミッター解放、レベル10！メイン・バスブースター・コントロール、オールクリアー！無限の力、今ここに解き放ち、次元の彼方へ突き進め！GO、アクセルシンクロ！カモン、TG ブレード・ガンナー（攻3300／守2200）！」

俺の場のモンスター二体が消え、次の瞬間、剣の生えた銃を持つ男

？が現れた。

「バトル！TGブレード・ガンナーでレッドアイズ・ダークネス・メタルドラゴンを攻撃！
シュート・ブレード！」

「ぐわあ！！！」

転生者 4000↓3500

「カードを伏せてターンエンド」

遊夜

LP…4000

手札…1枚

場…モンスター…TGブレード・ガンナー

伏せカード…1枚

「俺のターン、ドロー！」

俺はライトニング・ボルテックスを発動！」

「俺はTGブレード・ガンナーの効果を発動！このカードを除外する！」

「な……！！つく……なら俺は真紅眼の黒竜でダイレクトアタック！」

「……………」

遊夜 4000↓1600

「ターンエンドだ」

「そしてこのタイミングでTGブレード・ガンナーは自身の効果で蘇る。」

「再び来い！TGブレード・ガンナー！！」

転生者

LP…3500

手札…0枚

場…モンスター…真紅眼の黒竜 ×1

伏せカード…なし

「俺のターン、ドロー！」

引いたのは…よし。

「俺はTGX3―DX2を発動！墓地のTGサイバー・マジシャン、TGラッシュ・ライノ、TGワーウルフをデッキに戻して2枚ドロー！」

「ここでドローカード！？」

「俺は強欲な壺を発動！効果で2枚ドロー！」

俺はTGカタパルト・ドラゴン（攻900／守1300）を召喚！効果で、TGジェット・ファルコン（攻1400／守1200）を特殊召喚！」

「また、シンクロをする気か……！？」

「俺は、レベル2TGカタパルト・ドラゴンにレベル3TGジェット・ファルコンをチューニング！」

☆2+☆3=☆5

「リミッター解放、レベル5！レギュレーターオープン！スラスト！ウォームアップ、オーケー！アップリンク、オールクリアー！GO、シンクロ召喚！カモン、TG ハイパー・ライブラリアン（攻2400／守1800）！」

俺の場のモンスターが緑の輪で包まれ、まぶしいくらいの光が発生した。

目を開くと俺の場には本を持った機械と融合した男が召喚されていた。

「TGジェット・ファルコンの効果！このカードがシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、相手ライフに500ポイントダメージを与える！」

「ぐあ！」

転生者 3500↓3000

「バトル！TGブレード・ガンナーで真紅眼の黒竜を攻撃！ブレード・ショット！」

「うわあああ！！！」

転生者 3000↓2100

「そしてこの瞬間！罠カードTG―SX1を発動！このカードは自分フィールド上に存在する「TG」と名のついたモンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時に発動する事ができる。

効果によって自分の墓地に存在するTGパワー・グラディエーターを特殊召喚する」

「な！・・・なあ！？」

「TGパワー・グラディエーターとTGハイパー・ライブリアンでダイレクトアタック！

マシンナイズ・スラッシュ！ブックス・インパクト！」

「うわああああああああああ！！！」

転生者 2100↓—2600

『ワアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！』

終わった瞬間、会場が歓声に包まれた。

「なんだあの召喚方法は！？」「あの状況から勝った！」「オーバーキルだと！！？」「くく！俺も戦いたいぜ！」などと、いろいろな声が聞こえてくる。

・・・最後のは十代だろうな。

「は！俺の勝ちだぜ」

「そんな馬鹿な・・・転生オリ主の俺が負けただと・・・・・・・・！！？」

転生者が何か言ってるけど無視。

「結城遊夜君、君は何もかもを圧倒する素晴らしいデュエルを見せてくれました。

よって非常に異例ながらもオベリスクブルーへの昇級です」

「ありがとうございます」

これで最上級か・・・あっけないな・・・。
まあ、いい・・・。

俺は、その場で声を張り上げて叫んだ。

「次はアンタだぜ、カイザー！！」

「ああ、楽しみにしているぞ、結城遊夜」

「ああ！」

第十話／月一試験 VS またまた転生者!？ (後書き)

今回の最強カードは『TG ブレード・ガンナー』。

テックジナス

《TG ブレード・ガンナー／T.G. Blade Blast
er》

アクセルシンクロ・効果モンスター

星10／地属性／機械族／攻3300／守2200

シンクロチューナー1体＋チューナー以外のシンクロモンスター1
体以上

手札からカード1枚を墓地へ送る事で、相手の魔法・罠による

このカードへの効果を無効にする。

相手ターンに1度、このカードはゲームから除外する事ができる。

この効果で除外したこのカードは、相手ターンのエンドフェイズ時に
自分フィールド上に戻ってくる。

このカードが戦闘によって破壊された時、このカードのシンクロ召
喚に使用した

素材1組が自分の墓地に揃っている場合、それらを自分フィールド
上に

特殊召喚する事ができる。

《本来のOCG効果》

シンクロ・効果モンスター

星10／地属性／機械族／攻3300／守2200

シンクロモンスターのチューナー1体＋チューナー以外のシンクロ
モンスター1体以上

このカードを対象とする相手の魔法・罠カードが発動した時、

手札を1枚墓地へ送る事で、その効果を無効にする。

また、相手ターンに1度、自分の墓地に存在する

「TG」と名のついたモンスター1体をゲームから除外する事で、フィールド上に表側表示で存在するこのカードをゲームから除外する。

次のスタンバイフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

遊「あのデッキのエースカードだな」

エースなのか？ハルバード・キャノンは？

遊「最強の火力を持つストライカー」

さいですか。

・・・このカードは手札を捨てただけで相手の魔法・罠の効果を無効にする強力な効果を持っているな。

遊「そのおかげで手札消費は激しいが、安心して攻撃できるぞ」

ただし、あくまでモンスター効果だからな。カウンター罠とか天罰とかには弱いぞ。

そして、アクセルシンクロだからこそ、召喚も難しい。

遊「手札がよければ簡単だけどな」

—————

今回はTGか。しかもなぜかアニメ版効果の。

遊「いや、送ってもらったのがTGには違いはないんだが、なぜか効果がアニメ版だったんだ」

ご都合主義乙。

遊「ウルセー」

—————

今回も見えてくれてありがとうございます。

遊「ゼクスユイ様、sirasu様、感想ありがとうございます。

これからもがんばるぜ！」

あと、アンケートをやってみたいと思います。

題して・・・『主人公の決め台詞』！

えーっと実は主人公の決め台詞がなくてですね、思いつかないので読者様に考えてもらいたいと思います。

遊「考え付かなかったのかよ」

すいません、凄くすいません。

でも、俺が考えると酷いことになるんだ！

遊「まあ、仕方ないか・・・駄目作者だし」

ヒドイ！

えーっと、締め切りは第2章が終わるまでとしたいと思います。

応募方法は感想、またはメッセージで送ってください。

遊「感想と一緒に待ってるぜ」

誤字・脱字、プレイングミスなどの指摘もあったら直しますので教えてください。

遊「じゃあ、また次回会おうぜ」

第十二話／ブルー寮の帝王 VS カイザー!! (前書き)

この話で第一章も終わりになります。

遊「一応、終わりと始まりだもんな」

今回はカイザーとのデュエルだ。

遊「本編へGOだ!」

第十一話／ブルー寮の帝王 VS カイザー!!

昨日あんなことを言ったからか、新しく入ったブルー寮だけでなく、女子からも物凄く悪口を言われるようになってしまった。

・・・一体どうしろと・・・。

「はぁ・・・」

「・・・大変だな、お前も」

「・・・三沢か？」

「ああ。それにしても酷いな、これは」

「仕方ないさ、ブルーはもとより、カイザーまで敵に回せば・・・」

「ほとんどの女子からはいい印象を受けない・・・ってことか」

「そういうこと」

「まあ・・・ドンマイ？」

「そう言ってくれるのは三沢だけだよ」

そういつて三沢と別れた俺は、新しい俺の部屋へと向かった。

今度は場所も近く、部屋も広かった。

・・・豪華すぎる気がするが。

コンコン

「すまない、結城、いるか？」

ん？ 来客？ 誰だろうか。

ブルー寮で訪ねて来るやつなんていないはずなんだが・・・。

「どちら様でしょうか？」

「丸藤亮だ」

「カイザーか。何のようだ？」

「何、暇をもてあましているようだからな。昨日とその前の約束を果たそうじゃないか」

約束……ってことは……。

「俺と……デュエルしろ」

カイザーSIDE

「すまない、結城、いるか？」

俺は今、結城遊夜の部屋を訪ねていた。
理由は、約束を果たすためである。

「どちら様でしょうか？」

「丸藤亮だ」

「カイザーか。何のようだ？」

「何、暇をもてあましているようだからな。昨日とその前の約束を果たそうじゃないか」

約束……あいつとデュエルをする約束をな。

さあ……

「俺と……デュエルしろ」

カイザーSIDE OUT

そうきたか……。

まあ、暇には変わりが無いし、もとよりそのつもりだったからな。

「いいだろう。その挑戦受けてやる。」

もちろん・・・^真 Sinのデッキでだ」

「ふ・・・そうこなくてはな」

「じゃあ、行くか」

とりあえず、俺らはデュエル場へ向かった。

そこは意外にも誰もおらず、俺たちしかいなかった。

「さあ行くぞ！」

「ああ！」

「^{デュエル}決闘！！」

「先行は俺がもらうぜ！俺のターン、ドロー！」

楽しみにしてたんだ、カイザーとのデュエルは！

懂れている人とのデュエルほど楽しみなものはない！

「最初から飛ばしていきますよ！俺は天使の施しを発動！3枚ドロ
ーして2枚捨てる！」

俺はフィールド魔法、SinWorldを発動！」

フィールドがビルが建っている普通の町でありながら何処か異質な
空間に変わった。

「俺はサイバー・エンド・ドラゴンを除外！」

「っ！来るか・・・」

「Sinサイバー・エンド・ドラゴン（攻4000／守2800）
を特殊召喚！」

《グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！》

ソリットビジョンで今まで雄叫びを上げたことのないモンスターが雄叫びを上げる。

・・・お前も嬉しいのか、こんなデュエルができて。

「それが・・・。」

「貴方のサイバー・エンドのSin^罪の姿です」

「ふ・・・面白い」

「俺はカードを伏せてターンエンドです」

遊夜

LP…4000

手札…1枚

場…モンスター…Sinサイバー・エンド・ドラゴン ×1

伏せカード…2枚

魔法・罠…SinWorld

「俺のターン、ドロ。」

このカードは相手の場にモンスターがおり、自分の場にモンスターがいないときに特殊召喚できる。

来い！サイバー・ドラゴン（攻2100／守1600）！」

あれがカイザーのフェイバリットカード・・・！！

「俺はパワーボンドを発動！手札のサイバー・ドラゴン2体と場のサイバー・ドラゴンを融合！

現れよ！サイバー・エンド・ドラゴン（攻4000／守2800）！！

パワーボンドの効果により、攻撃力が2倍になる！」

サイバー・エンド・ドラゴン 4000↓8000

「行け！サイバーエンド・ドラゴンでSinサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃！エターナルエヴォリューションバースト！」

「この瞬間！罨カードガードブロック！！戦闘ダメージを無効にし、カードを1枚ドロロー！」

「だが、破壊はさせてもらおう」

「つく……！！」

Sinサイバー・エンド・ドラゴン……！！
流石カイザー……強い……！！

「俺はサイバー・ジラフを召喚。このカードをリリースすることでこのターン、効果ダメージを無効にする」

「うち！ならパワーボンドのダメージは……」

「当然無効だ。カードを伏せてターンエンド」

カイザー

LP…4000

手札…0枚

場…モンスター…サイバー・エンド・ドラゴン ×1

伏せカード…1枚

「俺のターン！ドロロー！」

手札のカードは……うん、今の状況はヒドイ。
でも、やるしかないよな。

「俺はカードを伏せて、ターンエンド」

遊夜

LP…4000

手札…2枚

場…モンスター…なし

伏せカード…2枚

魔法・罠…SinWorld

「俺のターン、ドロー。」

お前はその程度か？なら失望したな」

俺、そこまで凄いやつじゃないんだけどな……。

「なら、これでお終いだ！サイバー・エンド・ドラゴンでダイレクトアタック！」

「その瞬間！手札のバトルフェーダーの効果を発動！このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する！」

バトルフェーダー（攻0／守0）

「つく、ターンエンドだ」

カイザー

LP…4000

手札…1枚

場…モンスター…サイバー・エンド・ドラゴン ×1

伏せカード…1枚

「俺のターン！ドロー……うし、俺は手札断殺を発動！」

2枚捨てて2枚ドローする……

「更に2枚目の手札断殺を発動！来たああ！俺はスターダスト・ドラゴンを除いてS i nスターダスト・ドラゴン（攻2500／守2000）を特殊召喚！」

「その程度のモンスターで何ができる！」

「俺は更に強欲な壺を発動！2枚ドロ！」

遊夜 2枚↓0枚↓2枚↓0枚↓3枚

「俺は歯車街を発動！効果でS i nスターダストは破壊されるが、その効果にチェーンしてスキルドレインを発動！効果が無効化されるため、S i nスターダストの破壊は免れる！」

遊夜 4000↓3000

「ほう・・・」

「カードを2枚伏せてターンエンド」

遊夜

LP…3000

手札…1枚

場…モンスター…S i nスターダスト・ドラゴン ×1

伏せカード…3枚

魔法・罠…スキルドレイン

歯車街

「俺のターン、ドロ！サイバー・エンド・ドラゴンでS i nスターダスト・ドラゴンを攻撃！エターナル・エヴォリュションバー
スト！！」

これを食らえば負ける……だが！

「負けるわけにはいかない！俺はSinCrowStreamを発動！効果でサイバー・エンド・ドラゴンを破壊！」

「させるか！俺は速攻魔法融合解除を発動！サイバー・エンド・ドラゴンを融合デッキに戻し、サイバー・ドラゴン三体を特殊召喚する！」

つく……流石カイザー、これさえも凌ぐか！！

「ターンエンドだ……！」

カイザー

LP…4000

手札…1枚

場…モンスター…サイバー・ドラゴン ×3

伏せカード…1枚

「俺のターン！……ここでドロカードを引いたら面白いと思いません？」

「ふ……だが、そう簡単には引けないさ」

「わかりませんよ……ドロ！俺は、今引いた貪欲な壺を発動！」
「引いたというのか！？」

「俺は墓地のSinサイバー・エンド・ドラゴン、クリッター、終末の騎士、D・D・クロウ、Sinパラレルギアをデッキに戻して2枚ドロ！」

このデュエルの勝敗は、このドロに懸かっている。

「一枚目！ドロ！」

引いたのはS i n青眼の白龍・・・こいつじゃない！
次のドローに全てを賭ける！

「二枚目・・・ドロオオオオオオオ！！」

引いたのは・・・次元融合！

「俺は月の書でS i nスターダストを裏守備表示にする！そして、デッキから青眼の白龍を除外してS i n青眼の白龍（攻3000／守2500）を特殊召喚！更にチェーンして激流葬！全てのモンスターを破壊する！！」

「自分のモンスターをも犠牲にしただど！！？」

「ここからは一方通行だ！！俺はライフを2000払い、次元融合を発動！効果によってそれぞれ除外されているモンスターをできるだけ特殊召喚をできる！」

遊夜 3000↓1000

「つく・・・俺は除外しているモンスターはいない・・・」

「俺は、除外していたサイバー・エンド・ドラゴン（攻4000／守2800）とスターダスト・ドラゴン（攻2500／守2000）、青眼の白龍（攻3000／守2500）を特殊召喚！！」

俺の場には次元の狭間より現れた3体の龍が現れた。

どれも伝説とも言えるデュエリストのエースたちである。

白い体と青い眼を持つ通常モンスターの中で最強のモンスター・・・青眼の白龍。海馬瀬戸が愛用していたエースカード。

3つの首を持ち機械的な体を持つ巨大な龍・・・サイバー・エンド・

ドラゴン。目の前にいるカイザーの最強のエースカード。
白と青の体を持つ未来の龍・・・スターダスト・ドラゴン。不動遊
星が愛用していたエースカードで、これから何度も世界を救うカー
ドだ。

俺の場合は最高の状態。唯一の逆転の一手だ、これで決める！

「サイバー・エンド・ドラゴン・・・・・・・・！！」

「これで終わりだ！サイバー・エンド・ドラゴン、スターダスト・
ドラゴン、青眼の白龍でダイレクトアタック・・・・・・・・！！」

「俺の・・・負けか・・・・。これからは戦ってくれるか？」

「ええ、なんどでも・・・・・・・・！！」

エターナル・エヴォリション・バースト！シューティング・
ソニック！滅びの疾風爆裂弾！！
バーストストリーム

カイザー 4000↓—5500

「結城遊夜・・・素晴らしいデュエルだった・・・。まさか逆転さ
れるとはな・・・」

「貴方もですカイザー。もう少しで負けるところでした」

「ふ・・・これからはお前がカイザーか・・・」

「いいえ、それは受け取れません・・・。カイザーは貴方にこそ相
応しい」

「ふ・・・そうか、では、また明日会おうではないか・・・『遊夜』
」

今、名前で・・・・・・・・！！？

「ああ、『亮』！」

―後日、

・・・あの後のことを言おう。次の日から、俺は亮とともに食事をしたりするようになった。

他の男子や女子も俺の悪口を言うやつはいなくなった。

なんでも、亮がデュエルの結果をみんなに言ったらしい。
今では謝りにくる女子もいるくらいだ。

・・・男子には納得できてないやつらもいるみたいだが。

何にしろ、アカデミアでの生活はこれまでの生活の比ではないほど満足している。

「亮・・・今度も勝たせてもらうぜ・・・！」

「ふ・・・望むところだ・・・遊夜！」

「行くぜ・・・！！！」

とりあえずは目の前のデュエルに集中するとするか・・・。

さあ・・・

「^{デュエル}決闘！！！」

（第一章・完）

第十一話／ブルー寮の帝王 VS カイザー!! (後書き)

今回のキーカードは『次元融合』だ。

じげんゆうごう

《次元融合／Dimension Fusion》

通常魔法（禁止カード）

2000ライフポイントを払う。

お互いに除外されたモンスターをそれぞれのフィールド上に可能な限り特殊召喚する。

遊「今回の決め手だな」

ああ、対になるカードを除外して特殊召喚するSinにはピッタリのカードだ。

遊「2000ポイントは大きいけれども、その分効果は絶大だ。

・・・そういやなんで異次元からの帰還じゃないんだ？」

各プレイヤーだけでも、こっちなら残っていられるし、魔法だから引いてすぐに使えるからな。

遊「そうか・・・」

—————

今回で第一章も終わりだな。

遊「次はセブンスターズか？」

そういえばそうだけでも、本編で入っていた冬休みなんかが先だな。

遊「ああ、そうか」

まあ、お楽しみになってことだな。

――――

遊「見てくれてありがとう」

たくさんの読者の皆様、ここまで見てくださってありがとうございます。

第一章はここで終わりですが、まだまだ続きますので、これからもよろしく願います。

遊「今まで感想をくれたsirasu様、語り部様、ゼクスユイ様、なすび様、深淵様、FOL様、無限の剣製作者様、自分不器用ですから様、クラウン様、本当にありがとう」

そして、今回も感想をくださったsirasu様、語り部様、本当にありがとうございます。

遊「これからもこの作品を」

作・遊 「よろしくな（お願いします）！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6304y/>

遊戯王GXの世界に転生した物語（意外とそのまんまな題名）

2011年11月30日18時45分発行